



キャンパス・コラム

私はいつも忙しい？

最近の学生は忙しそうだ。授業やゼミだけでなく今も昔も変わらないはずだ。

アルバイトやサークル活動だけでなく、ボランティア活動、インターンシップ、ダブルスクール等、キャリアデザイン関連だけでも大変な負担になっているようだ。教員の側が、行政機関やNPO・NGOでのインターンシップを単位化し、維持するために四苦八苦するのは、職業柄仕方ない面もある。ただ、本来ヒマな人間の代表のように思われていた大学生の側が、これほど忙しいのは、「異常な」状態に思われる。

手帳の予定欄の空白を埋めて満足し、携帯電話のアドレス帳に登録してある友人(?)の人数を自慢している学生をみると、「これはヤバいな」という思いが先にくる。忙しさに身をまかせていると、ものを考えなくなるからだ。40台半ばという年齢からなのか、法科大学院などの専門職大学院立ち上げに伴う学部改革の波に巻き込まれているからなのか、最近ではヒマな職

業のはずの大学教授も忙しい。手帳の予定欄が1年先まで真っ黒に埋まっているのを見ると、絶望的な気分が襲われる。こういう時期にはものごとを深く考える余裕が失われているからだ。

「忙しい」とは、まさに「心を亡くす」という意味で、思考力そのものを喪失している状態なのだ。20才前後の時期に「何ものでもない」状態に耐えることが、つまり思考する状態にすることが、その人の存在の器の大きさを決めていく。かつてフランスの哲学者ヴァレリーは、デカルトをもじって「時に私は思考し、時に私は存在する」と述べたことがある。

おそらく、21世紀になっても、人間はときどき思考するその瞬間にしか「存在」していない。逆に言えば、忙しさに身をまかせて自己に満足している人は、「非存在」と化しているであろう。その意味では、手帳をびっしりと埋めている学生たちは、本能的にこのことを察知したうえで、自己の「存在証明」に勤しんでいるとも言える。だとすると、最近の学生も、教員が思っている以上に、したたかな「存在」なのかもしれない。